

2013 年は日英交流 400 周年 ～JAPAN400 のご紹介～



ロンドン事務所

1 ご存じでしたか？今年の日英交流 400 周年 ～400 年前の歴史を紐解く～

2013 年は日英交流が始まって 400 周年の記念すべき年です。これを祝うため、日英双方で活発な動きが出てきています。当事務所も日本側自治体の窓口としてこうした動きに協力させて頂いています。

英国側では JAPAN400 という実行委員会が組織されています。ここではまず、その共同委員長の 1 人でもあるロンドン大学東洋アフリカ研究学院 (School of Oriental & African Studies, SOAS) のタイモン・スクリーチ教授の説明を基に 400 年前の経緯を簡単にご紹介します。

1613 年の夏、東インド会社のクローヴ (Clove) 号という船が長崎、そして平戸 (今の長崎県長崎市、平戸市) にやってきました。

船長ジョン・サリスはイングランド国王ジェームス 1 世からの公式の書簡と贈答品を徳川幕府に届けました。将軍職を離れ駿府城 (現在の静岡市) にいた徳川家康には望遠鏡 (アジアでは初めてのものであった可能性がある) が、江戸の将軍秀忠には金のカップとカバーが、イングランド製の大量の布地と共に届けられました。



記者会見で歴史的経緯を説明するスクリーチ教授

サリスは秀忠から返礼として 2 組の鎧を託され、その後駿府まで戻ると、1600 年からオランダとの交易の橋渡し役として家康の相談役を務めていた英国人ウィリアム・アダムス (三浦按針) の協力を得て、公式の朱印状 (貿易許可証) を得ました。サリスは次に京都へ行き、家康からジェームス王への返礼として贈られた金屏風を受け取りました。さらにサリスは平戸に英国商館を設置し、当時の平戸藩主松浦鎮信から、既に商館を持っていたオランダ同様、温かく迎えられたそうです。

クローヴ号は 1613 年の終わりに漆器や屏風など多くの日本の芸術品とともに日本を離れ、1614 年 12 月にロンドンに帰着。漆器はオークション (競売) で売られましたが、これがイングランドで初の競売だったそうです。絵画は翌春、イングランド二度目となる競売にかけられました。

ジェームス 1 世は 5 枚の金屏風と鎧を受け取り大切にするとともに、アジアに関心を持ち、サリスの航海日誌を 5 回も読んだそうです。

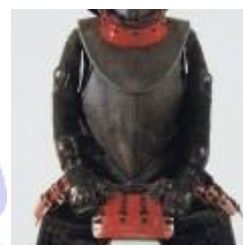
以上が当時の経緯ですが、その後イギリスは東アジア貿易では十分に利益を上げることができなかったことなどから、1623 年に日本から撤退。その後長い鎖国の時代を経て、日英が再び交わるのは幕末まで待たねばなりませんでした。

2 日英双方で様々なイベントが計画中

英国側では、JAPAN400 実行委員会を中心に、今年 1 年間行われる様々なイベントが記念行事として関連付けられており、ちょうどこの 1 月末から 2 月初めにかけて始まりとなるイベントが行われました。

スタートを飾ったのは 1 月末からロンドンで上演が始まった市村正親さん主演の演劇「家康と按針（英語名: Anjin: The Shogun and The English Samurai）」で、初演の日には関係者の多くが集まるとともに、演劇の内容は当地の新聞各紙をはじめ様々なメディアで紹介されています。また、この 2 月 5 日にはクローヴ号を出した東インド会社とも関係の深いスキナーズ・ホールという歴史ある会場で関係者約 170 名を集めての歴史講演会及びレセプションが開かれ、ゲストとして、王室の一員でもあるグロスター公ご夫妻もお見えになりました。平戸市の酒蔵から送られた日本酒が振る舞われるとともに、黒田平戸市長から関係者に送られたお祝いのメッセージを当事務所からご紹介させて頂きました。

また、ジェームス王やサリス、按針などの書簡や記録が大英図書館で展示されます。家康が許可した朱印状の実物はオックスフォード大学の図書館で、二組の鎧はリーズとロンドン塔の武具展示館で展示されます。金屏風は行方がわからないそうですが、サリスが個人的な鑑賞目的で持ち帰った春画も、10 月初めに大英博物館で展示されます。



将軍秀忠からの
返礼の鎧

9 月中旬には按針の出身地であるケント・カウンティのメドウェイ市ジリングムでウィリアム・アダムス・フェスティバル（按針祭）という大きな祭典も行われます。平戸藩主松浦家の直系の御子孫である松浦章さんもお見えになり、呈茶式などが行われる予定です。

日本側でも、三浦按針にゆかりの深い 4 市（平戸市のほか、按針が最初に日本に上陸した大分県臼杵市、按針が家康の命を受け西洋船の建造を行った静岡県伊東市、按針がその功績により家康から領地を授けられた神奈川県横須賀市）が連携して按針サミットや按針祭などのほか、英国との交流にちなんだ様々な行事を開催されるべく準備中と伺っています。

特に、当時英国商館が設置された平戸市では、「日本と英国の交流が始まった地」という史実を全世界に発信するために、文化・観光・国際交流など様々な分野での事業展開が検討されています。上述したジリングムでの按針祭の参加に加え、松浦資料博物館の所蔵品を英国で展示するなど、英国側の事業との連携も予定されています。昨年 10 月末には、英国側との関係強化等を目的に、黒田市長以下平戸市御一行が当地をご訪問され、当事務所でも関係機関への訪問等を支援させて頂きました。

こうした草の根交流の支援こそ、CLAIR 海外事務所ならではの仕事のひとつと言えます。微力ではありますが、引き続き英国における各市の発信・活動拠点としてお手伝いをさせていただくと共に、一連の行事を通じ日英関係の更なる強化や、地域の交流人口の拡大につなげることができればと願っています。

3 英国流に学ぶ ～しかし最後はやはり「人」～

英国側の実行委員会は、上述したスクリーチ教授と 1980 年代から日英の文化・教育交流に尽力されてきたニコラス・マククリーン氏のお二方が共同委員長となり、それを BBC の元東京特派員など、これまで日英関係に深く関わって来られた方々が支援する形で進められています。



スーザン・ヘイドック
元メドウェイ市長

また、按針の出身地であるメドウェイ市の代表は、伊東市や横須賀市との姉妹都市関係の発展に長年尽力されてきたスーザン・ヘイドック元市長（元市議会議員）です。

実は、昨年 8 月に開かれた最初の準備会合に筆者が参加した際には、組織の位置付けや資金の見通しなどがまだはっきりせず、どのように動いていくのか正直なところ不安もありました。英国では厳しい財政緊縮策が続いており、地方自治体や政府からはこうした交流事業への支援が

期待しづらい状況もあるためです。

しかしこの半年の関係者の奔走の結果、日系を含む様々な企業や団体から資金面も含めた支援が得られると共に、顧問メンバーには昨年末に帰国されたデイヴィッド・ウォーレン前駐日大使や、国土交通大臣から VISIT JAPAN 大使に任命されているマーティン・バロウ氏ら錚々たる方々が名前を連ねています。こうした方々も出席された 1 月 10 日の記者発表や 2 月 5 日のレセプションは大変な盛況でした。メディア出身の方々が中心になって作成されているホームページ (<http://www.japan400.com>) も、既に



平戸の日本酒で乾杯！（2 月 5 日の関係者レセプション）

10 万アクセスを超えたということです。

このプロジェクトに関わってみて、形式にはそれほどこだわらず「やる時はやる」、英国流はこうなんだな、と感じ入ると共に、関係する方々の熱意や、連携の力強さに圧倒されています。こうしたことを通じ改めて実感するのは、国際交流を支えるのは、やはりどこへ行っても熱意をもってやり遂げる「人」の存在だということ。さらに、こうした人の力を生かす上で、人的なネットワークを日頃から如何にして構築しておくべきかということ海外事務所使命の一つとして強く意識する今日この頃です。

(羽生所長 総務省派遣)